

みちのく

成人編

—第43号—



令和4年度 仙台矯正管区

み
ち
の
く

成
人
編

第四十三号

仙
台
矯
正
管
区



仙台矯正管区

過去の作品はこちらから
御覧いただけます→

仙台矯正管区



仙台矯正管区フロントページ
https://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00002

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十三号を数えております。

当管区では「みちのく書画文芸コンクール」を開催しており、本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和五年三月

仙台矯正管区

表紙の題字は久道静氏の揮毫によるものです。

「みちのく」成人編第43号
令和5年3月発行

編集発行 仙台矯正管区第三部
〒984-0825 仙台市若林区古城3-23-1
TEL 022-286-0178

目次

【文芸部門入賞作品】

作文の部 2

【選評】 原田勇男 先生

詩の部 18

【選評】 原田勇男 先生

短歌の部 25

【選評】 上林節江 先生

俳句の部 30

【選評】 鈴木三山 先生

川柳の部 35

【選評】 佐藤岩男 先生

文芸部門審査総評 40

【書画部門入賞作品】

絵画の部 42

【選評】 枅澤 怜 先生

ポスター・カレンダーの部 47

【選評】 鈴木智枝 先生

毛筆の部 50

【選評】 鈴木霽月 先生

硬筆の部 55

【選評】 鈴木霽月 先生

書画部門審査総評 59



作文の部

審査員

日本現代詩人会会員

日本文藝家協会会員

宮城県詩人会顧問

原田 勇男



陽のあたる場所

山形刑務所 龍齋

今日もオレは走り続ける。

運転席から飛び降りて、重い荷物を両手に持ち、車の後ろに積んで回収したら、また次の回収所へ……。とことんその繰り返し。

配達業や運送業じゃない。回収する荷物は誰からも必要とされなくなつた物……。ゴミだ。

オレはゴミ回収業者だ。

朝からゴミ集積車を駆り、街の端から端までを渡り、誰も触りたくない物を心を無にして掴み取り、雨にも負けず、風にも負けず、二オイにも負けぬ丈夫な鼻を持ち任務にあたっている。この職に就いて二年目の二十九歳だ。

毎日ゴミを集めて駆け回っているから二オイが身に染みついて、道行く人には白い目で見られがち。でもそれが仕事だから仕方なし。

オレだって好きでこの仕事を選んだ訳じゃない。きつい・きたない・くさい：まさに3K。誰もが嫌がる仕事をあえて選ぶのは、誰かがやらねばならぬから：なんて言うのは建前で、職を転々と繰り返し、転がり転がって行き着いた先がここだったと言うまでだ。

もつと楽な仕事があればそっちを選ぶ。それが本音だ。だが、そんなことを求やいたってどうにかなるもんじゃあない。職を転々としなければならなくなったのは自分のせいだ。

オレがもつとクリーンな生き方をしたりや、街をこんなクリーンにする必要もなかった。

オレには前科がある。しかも一つや二つじゃあない。世間はいつだって犯罪に手を染めた者には冷たい。それは仕方のないことだ。

それが分かっているから過去を隠して仕事を探す、そこはこのご時世、ネットで検索をすれば何でも出てきちゃう。結局少ししたらバレちまうて……

後は言わなくても分かるだろ。

オレは小ぢやかな頃から悪ガキで、十五どころか十三で不良と呼ばれた悪童だった。高校には上がったものの、周りの奴らと連るみ喧嘩・恐喝に明け暮れる日々。鑑別にも当たり前に入って高校は中退。その後も悪い連中とは繋がりが続け、ちよくちよく警察の厄介になりっぱなし。しばらく留置場で頭を冷やすが、それでも外に出たらまた同じことの繰り返し。

なんでそんなことをしてたのかと聞かれりゃあ、上手く答えるのは難しいが、同じような奴らと同じことをして、自分の居場所を確かめたかっただけなのかもしれない。

仲間だと思えるような奴らとラップミュージックの流れるクラブで夜な夜な騒いでた。

でも、傷害で何度目かの警察から戻った時、自分が今いる場所に違和感を覚えた。

オレは自分が戻ったことできつとまた仲間が歓待してくれるものと思っていたが、連中はなんだもう戻ってきたのかと言わんばかりの素っ気無さだった。愛想笑いのハイタッチ。

その時オレは気づいた。ああ：オレはここにいなくてもいい奴なんだと。

今まで共にいることで何となく仲間意識を感じていたが、そんなのはまるで幻想だった。

オレはいつか今まで何をしてきたのか。ただ自己満足のためだけにあんなことを繰り返ししていたのか。そんなのクズのすることだ。オレの人生はゴミくず同然じゃねえか。

そんなくだらぬことで手を汚し、身を落としていたのかと思いついた。これまで自分がしてきたことを恥じ、仲間と思っていた奴らと一緒にいることすら嫌気がさした。

それからそいつらとは付き合うのをやめて、二十五を過ぎてたオレはまともな職を探したが、今までが今までだったから上手くいくはずがなかつ

た。飲食や土木…色々とあたってはみたけど、前科のハンデもあって長くは続かなかつた。その度、職を漂泊し続けた。

オレを必要としてくれる場所なんてどこにもないんじゃないか。そんな風にさえ思った。

そんなオレを拾ってくれたのが今のゴミ回収業の社長だった。まさに捨てる神に拾う神あり。捨てるゴミに拾われるゴミもありだ。

社長はオレみたいなものを見つけては自分の会社へ雇っていて、他にもオレと似たような奴らが多くいる。後で知ったところ、社長は協力雇用主と言って、あえて前科者などを受け入れているらしい。本当にありがたい話だ。

似た者同士が集まった場所はオレにとって居心地悪いものじゃなかった。文字通りの汚れ仕事でも、お互い切磋琢磨し合える本当の仲間ができたようだった。流れ流れて着いた先はゴミの島のように見えても、決して掃き溜めなんかじゃない。オレはそう思っている。

さて、今朝の回収もここで最後だ。大学の敷地内の回収所へ車を乗り入れ、バックで後ろ付けしてゴミを放り込む。このゴミ量はハンパなくて、最後の一つの頃には汗だくだ。

無事回収を終えてゲートの前で停車していると、数人の学生が歩いて来た。その内の一人がこっちにしかめ面を向けて何か言った。

「げえ、何だ？くっせくな」

オレのゴミ収集車へ向けての言葉だった。

「ホント、こんな所止まってんじゃねえよ」

オレはゲートが開くとすぐに車を出した。嘔みしめた奥歯の鈍い音が脳天に響く。

お前らの出したゴミを回収しに来たんだぞ。

飲み込んだ言葉がいつまでも頭の中を駆け回った。心ない言葉に怒りと惨めさが入り混じって、悔しさが込み上がる。少し前のオレだったらアイツらに殴りかかっていただろう。

でも、今はそうするわけにはいかなかった。こんなオレを拾ってくれた社長に、迷惑をかけるわけにはいかない。共に頑張る仲間達に負担をかけるわけにはいかない。

よし、こんな時こそラップの出番だ。気分が落ちた時のオレの秘密兵器。

へ今日もオレは走り続ける

両手にヤゴミ袋抱えてる

くせえ奴だと人はあざける

そんなの知るかどひねくれる

それでも今日も 手も顔も軀も

ゴミにまみれてもおもまだだと

東から西へ 北から南へ

この街きれいにし続ける

ちよつと自虐的だが、鬱屈した気持ちをリリックに乗せると幾らかマシな気分になった。

オレはこうして時折ラップで自分の気を紛らわせている。毎晩通ったクラブで唯一の収穫と言ってもいい。ラップは今のオレを奮い立たせてくれる無くてはならないものだった。

回収したゴミを処理場へ運び会社へ戻った。本日の仕事は終わりだ。帰りに銭湯で汗と汚れをさっぱり落として、手頃な美味しい飯を食ったら、今日はゆっくりと休むことにしよう。

翌日。今日ももちろん仕事だ。早朝と言うにはまだ暗い空。冬の寒さが身に浸みる。

SDGs (持続可能な開発目標) とやらに取り組む世の中になって、少しはゴミが減ってきているのかもしれないが、まだまだオレらの仕事が無くなることはないだろう。

オレはまた軀をフル回転させて街を回った。

朝日が射してから小学校の近くでゴミ回収していると、後ろから突然声をかけられた。

「お仕事大変ですね。頑張ってください」

驚いて振り向くと小学生達が列をなしていた。朝の登校だろう。先頭の年長らしい少女がオレに話しかけたようだ。少女の純粋な笑顔がこっちに向けられて自然と言葉が出た。

「ありがとう」

小学生達はランドセルを揺らして学校の門をくぐって行った。オレはいつになく清々しい気分になって、いつの間にか微笑んでいた。

そろそろ朝飯前の仕事が終わると言う頃、いつもの業者のゴミ回収所で妙な物を見つけた。白いレジ袋だ。ゴミ袋収納ケースの上にポツンと乗っかっていて、初めオレは中に入れるのが面倒で上に乗せたのだと思った。でも、手に取ってみてそうではないことに気づいた。

レジ袋には丁寧な字でメモが貼ってある。

——いつもご苦労様です。よかつたら休憩時間にもこれをどうぞ。——

袋の中を覗くとサンドウィッチと菓子パン、それに缶コーヒーが一本入っていた。ちゃんと食べられるヤツだ。ゴミなんかじゃない。

こんなことは初めてだった。この業者の人かは分からないが、オレのためにこれを用意してくれたその好意が素直に嬉しかった。思いやりが胸に浸みた。真面目にやってくれば誰か見てくれている。そう思えた瞬間だった。

今日は良いことばかりあるな。こんな日もあるんだ。この仕事も捨てたもんじゃない。

オレはそれを朝食としてありがたくいただいた。いつもよりずっと美味しく感じた。

ホクホクした気持ちで会社に戻ると、既に仕事を終えた仲間達が笑顔で迎えてくれた。

共に働き、共に苦を分かち、共に喜び合える仲間。帰るべき場所。ずっと日陰で生きてきたオレだが、やっと見つけられた気がした。

ここがオレの陽の当たる場所だ。

さて、明日も早い。そろそろ帰るか。そうそう、ゴミの分別はしっかりと頼むぜ。あれ、結構大変なんだ。あとはオレにまかせてくれ。明日もオレは走り続ける。

寸評

出所して就職しても世間の風は冷たかった。前料があげかれ転々と職を変えた。最後にごみ回収の仕事に就いた。毎日ごみを収集する作業に追われた。ある日、小学生の女の子に「頑張ってください」と声を掛けられた。また、ごみ袋収納ケースの上に白いレジ袋が置いてあり、メモ用紙に「よかつたら休憩時間にもどうぞ」と書いてあった。仕事仲間もできて、ここが「陽のあたる場所」になった。このラストシーンが秀逸で金賞に推した。



継続は力なり

福島刑務支所 I・A

小学校の卒業式で、先生が私に贈ってくれた言葉が、「継続は力なり」です。

私は入所してから八年半、和裁作業で帯を縫ってきました。私は、不器用なので細かい作業が大の苦手です。なので、最初は不安でいっぱいでしたし、短針に糸を通すことすら難しいくらい何も出来ませんでした。

この八年半の間、何度涙を流してきたか、何度もう嫌だと思ったか、何度もうやりたくないと言ったことか……。今まで続けられてきたことが奇跡だと思います。この奇跡は、私が作り上げたことではありません。私一人では、とづくに投げ出していました。私が投げ出しかけた時、いつもサポートしてくれた作業係や、仲間の励まし、担当の先生の支えがあったからこそ、続けていくことができた、感謝の気持ちでいっぱいです。

帯は、作った品を販売するのではなく、お客様が生地・帯芯を購入した物を、お客様の要望に合わせて仕立てる、というオーダーメイド式です。なので、私の手元に来た材料は、もうお客様の「品物」なのです。だから私は、「材料」という表現方法が好きではありません。私たちにとっては、刑務作業として与えられている作業だけれど、お客様は、プロに作ってもらうために高いお金を出し、注文しているので、私たちの諸事情などお客様には関係のないことなのです。新人だから……苦手だから……やりたくないから……。そんなことは、お客様には関係のないことです。

私は昔、こういう経験をしたことがあります。旦那と久々のデートをしたとき、洋服店で気に入ったパーカーを買ってもらいました。凄く嬉しくて、帰宅後に心を弾ませながら着てみたところ、ボタンの一つが壊れていたのです。その時のショックは、今も鮮明に覚えているくらいです。どうコーディネートしようかな、どこに行く時に着ようかな、そう考えてウキウキしていたのを、ボタン一つが壊れていたこと

で、どん底に突き落とされた気分になりました。そのパーカーは、取り替えてはもらいましたが、私の気持ちは元には戻りきれず、心のモヤモヤは晴れませんでした。

この経験があるので、帯を縫っている時、これでいいや、これくらいでいいか、と妥協をしたくない気持ちがあります。

帯を受け取るのを楽しみにしていたり、着用する日を心待ちにしていたり、一本一本想いがある帯を、これでいいや、という仕上がりにはしたくないのです。お客様が、仕上がった帯を手にして、笑顔に、ウキウキするような気分になれるような綺麗な帯を仕立てることを常に心掛けてきました。

そう志を高く持っていて、私が不器用なことに変わりはなく、難しくてもやりにくい帯を縫っていると、もう嫌だ……誰か代わりにやってくれないかな……と、投げ出したくなってしまいます。作業係に、泣き言を溢してしまっても沢山ありました。その度に支えてもらい、続けていくことができました。

八年半の間、一つのことを精一杯やり続けてこれたことは、私にとっては、大きな進歩だと思います。これが社会だったら、とづくに投げ出し、辞めていたと思います。好きなように作業が選べる環境だったら、壁に直面する度に、やりたくないと言っていたと思います。

しかし、ここは刑務所。作業を選ぶことはできません。やりたくない、辞めたい、その自由はないのです。私の逃げ癖が改善しつつあるのは、この環境に居るからです。

細かい作業が苦手、出来ないことが沢山あった帯を縫うこと。八年半続けてこれたことで、得意とまでは言えないけれども、色々なことを任せてもらえる技能は、身に付いたと実感しています。まだまだ苦手意識は高いし、自分の実力によく自信はないけれど、沢山の経験を積み重ねてきたことで、八年半前の私よりは、成長できていると思います。それは、縫う技術だけでなく、責任感を持って作業に臨む精神を養えたことです。

私は、何の才能も持っていない、凡人です。何でもそつが無く出来る人を、羨ましく思っています。私は、才能がない分、努力を積み重ねていくしかないのです。一見、不幸なことだと感じるけれど、努力を続けていけば、身となることを実感できたので、「努力に勝る才能はない」と、前向きに考えられるようになりました。

「継続は力なり」を、本当の意味で理解することができたのは、作業を通じて、出来ないことでも、コツコツとやり続けることで、出来るようになることを、経験したからです。この経験は、私の人生の財産になりました。

この度、私のいる工場から、帯作業が撤退することになってしまいました。私は、出所するまで、帯作業をやりたい、やっっていくものだと思っていたので、とてもショックでした。そして、不器用な私は、次の作業への不安もいっぱいあります。絶対に、慣れるまで時間がかかるだろうし、上手く出来なくて、投げ出したい気持ちになると思います。

だけど、過去の私とは違う。続けることが大切。壁に直面しても、一つずつ乗り越えていくことで、手にできることがある。そう考えられるようになったので、新たな作業でも、コツコツと頑張っていきたいと思います。

「継続は力なり」、この言葉は、私の人生のテーマです。

忍耐のない私に、人生で大切な道しるべとなる名言を与えてくれた先生に、とても感謝しています。

これからの所内生活においても、社会に戻ってから、沢山の困難に遭遇することだと思います。苦手なことや、壁に直面した時でも、投げ出さずに、まずは続けてみることを心掛けていきたいです。何事からも、逃げずに、前向きに歩んでいきたいと思えます。

寸評

小学校の卒業式で、先生が贈ってくれた言葉が「継続は力なり」だった。入所してから一年半、和裁作業で帯を縫ってきた。不器用で細かい作業が苦手だった。投げ出しかけた時、いつもサポートしてくれる作業係や仲間の励まし、担当の先生の支えがあったからこそ、続けることができた。今は「継続は力なり」を本当の意味で理解できる。何事からも逃げず、前向きに進んで行きたいと思う。素朴だが、その努力を讃えたい。



水のような生き方

福島刑務支所 H・A

蛇口をひねれば水が出る便利な世の中です。私は入所して初めて水の大切さを知りました。なぜか福島の水がとつても美味いからです。水を買って生活をしていたので、本当に感動しました。節水を普段から心がけています。

そしてこの水からヒントをいただき学んだものがあります。「上善水の如し」という言葉があります。「最善の生き方」ということです。つまり人間にとって「水のように生きることがもつとも幸せな生き方」になると言うことです。水のような生き方をすればイライラからストレスからも解放されます。穏やかな心を取り戻すことができます。

たとえば「一滴の水」でも溜れば「大きな結果」となる。「一滴の水も積みれば湖水となる」ということわざがあります。一滴の水とは小さな努力であつてもコツコツ積み重ねていけば成果につながります。小さな一歩であつてもちよつとずつ前進していけば大きな成果につながります。これも水のような生き方ということにつながる考え方だと思います。つまりすぐに大きな結果を出そうと焦るのではなく小さな努力小さな一歩をコツコツ積み重ねていくことを大切に考えていくのです。水ってありのままの姿あるがままに自然の流れに従って生きていくことが大切だと思う。たとえば「水」は上から下へと流れていきます。それは自然の法則です。「水」はそんな自然の法則に逆って自分勝手に逆流などしません。人間もそんな水のような生き方をしていくのが良いということです。

「水」という言葉で思いついたことがあります。流れにまかせて生きていく、柔軟に生きる、素直に生きる、恵みを与えて生きる、謙虚に生きる、かたよらず生きる、あふれないように生きる、流れて流して生きる、清らかに生きる、これが水の生き方です。

水のような心を持って初めて幸せを実感できると思う。本当に水って素

直だなあ、ありのままに生きています。

水は丸い器に入れると丸くなり四角い器に入れると四角になります。どんな形の器にも逆らわず実に柔軟性に富んでいます。

また川を見ているとそう水は高い所から低い所に向かって流れます。

その姿は低姿勢で謙虚だと言えるでしょう。さらに水はあらゆる生命に多大なる恩恵をもたらしてくれます。にもかかわらず固い岩を打ち砕く力を秘めているのです。

水は目標を持って流れる。人間も目標へ向かって進む。水の持つ性質は「生きるヒント」を与えてくれる。

一、水はみずから動いて、他の物を動かす。

二、水はいつも進路を求めて、止まることなく動いていく。

三、水は障害に出会うと、その勢いを百倍にも増す。

四、水はみずから清らかな存在である。そして、あらゆる汚れたものを受け入れながら、その汚れを洗い流して清らかなものにする。

五、水は広い海となり、蒸発して雲となり、雨や雪にも姿を変え霧ともなり、水面はものを映す鏡にもなる。しかし、どのように姿を変えても、水としての本質を失わない。

心に余計なものが詰まっていらないか自己点検してみる。

心を空っぽにして初めて「水のような生き方」ができる。水が持つ性質から生きるヒントや生きる力を得ることができます。

ただしそのようなヒントや生きる力を得るために大切なことは「心を空っぽにしておく」ということなのです。

心が空っぽになっていけば、空の容器に水が注ぎ込まれていくようにしてそこは沢山の生きるヒントや生きる力が満たされています。

心を空っぽにするとは、余計な先入観や誤った考え方を捨て去るということです。怒りや妬みといった感情を心から取り除く。

いらだちや焦りといった感情を心から洗い流す。余計な欲や虚栄心といったものを心から捨て去る。

マイナスの感情が一杯詰まっている心では水が持つ性質から何一つ学び取ることができません。何物にもとらわれない自由な空っぽの心を作ることでよって、その心の中に貴重な知恵や力が満たされていくのです。

「水のような生き方」ということは、ある意味心から悪い要素を全て取り払って心を空っぽにして、初めて可能になるとも言えるのです。

人の心には知らず知らずのうちに愚かな考えや、ネガティブな感情が沢山入り込んでいる場合があります。そういうことが見つかったらきれいに取り去ることが大切です。

余裕があるからこそ、人間的に生きていける。流れる水は腐らない。前進する心も腐らない。

平地ではゆったりと急流では勢いを増して生きる。

清らかな心で汚れた心を洗い流す。人間関係のイザコザは水に流して忘れ去る。

人に親切にしたことも水に流して早く忘れる。水に秘められた力によって人は生きていく。

水のような心を持って初めて幸せを実感できる。

この福島の綺麗な水と出逢って人生が変わりました。「ありがとう」感謝しています。この気持を持って出所したいです。今後の人生は本当に自分次第だと思っています。毎日が勉強です。一日に感謝して受刑中です。

最後に水に感謝です。水のような生き方がしたいです。

寸評

「上善水の如し」という言葉がある。「上善」は「最善の生き方」という意味で、人間にとつて「水のように生きることがもつとも幸せな生き方」になることだと筆者は言う。「一滴の水」も溜まれば大きな結果になる。「一滴の水」でも積めば湖水になるという諺がある。筆者は水の性質や特徴から、さまざまな事例を挙げて水のような生き方を推奨する。心を空っぽにすると「水のような生き方」ができる。現代人に必要な生き方かも知れない。



選んだ道潜る門

宮城刑務所 I・H

門には色々な門があります。肉眼で見える門や、心眼でないと見えない門もあります。

進む戦車の前にデモ隊の一人の学生が、大手を広げて立ちほだかった、中国の天安門。

ドイツが東西に分けられ、ベルリンも東西ベルリンに分割された境のブランデンブルク門。同じく大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の境の、三八度線にある板門店。

フランスのパリの凱旋門は、フランス軍を迎える為のもですが、そこをナチスドイツ軍が通過するシーンは有名です。

昔の平安京には朱雀大路すざくおおじの南側に羅城門らじょうもんがあり、今昔物語の中では羅生門らしやうもんと呼ばれる鬼の棲家とされて、そこに棲む鬼の片腕を、渡辺綱が切り落とした話として知られています。

芥川龍之介の小説の「羅生門」では、長い髪の女の死骸と、その死骸から髪の毛を抜き取る老婆と、この老婆の抜き集めた髪を奪う盗人しか登場しません。「人喰った者は鬼になる」と、雨月物語にある如く、死者の髪で生計を立てた者を、暗に鬼に見立てたのかも知れません。或いは、中国の「聊齋志異しやうしやうし」という本では「人は死ぬと鬼になる」といい、死者の名簿を鬼籍きせきと称し、鬼籍に入ると言えば亡くなったことを指すので、髪を抜かれていた女の人を鬼に見立てたのかも知れません。幽冥境ゆうめいの羅生門も、ヴェネツィア映画祭でグランプリを得た、黒沢明監督の作られた「羅生門」になると、三船敏郎の盗人ぶりや芥川龍之介の「藪の中」といった作品も加えられていて、人の浅ましさが強烈でした。

江戸城に京都御所が移り、皇居となった後の大手門や半蔵門、桜田門は知られています。鬼門きもんはあまり知られていません。

この鬼門は眼に見えない門で、陰陽道おんみょうどうの方角の吉凶占いの、北から東よ

りの方角を良と呼び、鬼門と称して危ういものと言います。その為江戸城の鬼門にあたる方角に、東照大権現とうしやうたいこんげんとなった「神君家康公」を勧請して祀ったのが日光東照宮で、江戸城の守り神として祀ったそうですが、彫刻で飾られた陽明門と共に、左甚五郎作のねむり猫でも有名です。

城や御所以外に仏教の仏門や山門、寺門が数多くあり、東京台東区の金龍山の浅草寺せんそうじの総門そうもんや内陣の仁王門におうもんが、この寺の裏側の吉原の大門ともどもよく知られています。

見えない門の中には譬えに使われたものもあり、キリスト教の主イエス御自身が自分を「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる」(ヨハネ十章九節)と譬えられています。又、人の体にも門があり、咽喉のどの声帯のある声門。気管が左右の肺に分かれる部分の肺門。食堂と胃の境の噴門や胃と十二指腸の境の幽門。肛門や陰門等があります。

これらに見えるものに門のイメージを重ねたものですが、眼には見えない門のイメージをロダンは、「地獄の門」として彫刻で現し、扉をつけて鴨居の上を下を見て考える風情の人も置いて、この部分を拡大した「考える人」の像はよく知られています。

門が転じて何に付くかを見ると、体系的にひとつの分野となっているものを始めようとする時、「入門にゅうもん」という表現がよく使われています。特にその分野に「道どう」が後付けされて、仏の教えを学び実践することに付けられて仏道ぶつどうと言ったり、千利休の茶の作法などを茶道と言ったりしますが、その道に入っていくのに仏道入門とか、茶道入門と言います。或いは、「道」ではなく「学がく」と付いているものにも「入門」は付加され、哲学入門、科学入門とあらば初心者向けとわかります。

入門の反対を「門出かいで」と言いますが、私は今、「道」とその草創そうそうの門を心に思い描き、歩み出しています。

刑務所の門が入ってから、眼には見えない、更生と贖罪しよくざいの道を歩む人が多いと信じています。しかしこの斯道しどう、やたら関門かんもんが多くて、石も無いのに躓つまずくし、迷うし、疲れるのです。選択の迷いは躓きになりますし、こ

の道は己の影と向き合うので、その醜い感情から目を逸らさないうで追究するのは疲れます。

更に、言葉に躓きます。贖罪は罪をつぐなうこと。償うは、金品・労力などで埋め合せることとあり、贖うとはあやまちや罪を許してもらうため金品を出すという意味だと電子辞書は述べます。(そうか、つぐないって損害賠償をすることなんだ)と躓いたりしたことあります。この躓きから、生命保険会社が、生命の値段をどうやって決めているのかを調べて、ホフマン式計算法とかライブニッツ式計算法といわれるものを使うと知るなどの、無駄な時間を使う躓きもありました。

今は、人の命を奪った罪は償いも贖いもつかないものだし、だからといって、無理だからと投げ出すことは絶対許されない、己の現状回復責任を、生涯問い続ける覚悟です。

この躓きを門に造り、斯道第一その門を「復元門」と名付け、現状回復の責任を己に問いつつ自ら応答して実践中です。

殺人とか、障害の残る大怪我をさせたり、強姦強制性交などを犯した場合、御遺族や、被害者御本人から法廷などで、「生かして返せ!!」とか、「元の心と体に戻せ!!」など、憤怒の声で罵られたりします。この罵声にどう対応出来るのだろうか?最初の内は、「無理です。ごめんなさい。出来ません。」といった類の言葉しか出て来ません。こういう罵声を己に浴びせ、己が応答する自問自答を「復元問答」と呼んで私は最も重要なものだと思っています。先の「無理です」は、罵声を受け止めていません。私は残念なこの態度を「蹴飛ばし」と呼んでいます。罵声に対し、「わかりました。生き返らせる方法を教えて下さい。やりますから。」といった承諾は、承諾に見えて承諾ではなく「切り返し」で、これも受け止めていません。似たものに、罵声に素直に従って生き返らせる方法を捜し、研究する「擬態逸らし」という形態をとる場合もあります。本気で捜しているのから自分の心を欺いているし、本気でないなら、生き返らせようとしている「擬態」をしている訳です。この復元問答によく似た、ロールレタリング

というやり方を、少年院ではやると聞きました。これはまず自分が被害者宛に手紙を出しますが、その手紙は自分に戻されて、今度は被害者として受取り、その手紙の返事を書いて出す繰返しで一人二役です。これは最初から被害者の視点を与えてしまうので「視点を自分中心の視点から主体的に自ら出て、被害者側の視点から共感的にその感情状態を想像して、感情や思いといった気持ちを慮る復元問答の最大の眼目」がありません。

自己に生じた問題を、自分中心の視点から主体的に自ら出て、相手の視点に立ち、そこから己の悪性や悔い改める点を捉えるという視座の移動を自分の意思で出来るようになることを、即自から対自への実存的変遷と言います。復元問答は老子のいう「無用の用」的な所があります。「生かして返せ!!」に応じようとしても、現在の科学では無理なのでそれからそれを繰返すのは無意味に思える筈ですが、無意味であればある程、私達はどこかに意味を見つけようとする「用」が生じます。「無理だと承知している筈なのに、なんで御遺族はその無理なことを言うのだろうか?」と考え出せば、御遺族の無理とわかっていても尚、それを言わなければおさまらない気持ちであることに気付くのはすぐでした。

このような復元問答をしないで、共感性が先に回復していれば「生かして返せ」の言葉にならざるを得なかった、痛烈な哀惜の思いや、命を奪った者への激怒憤懣が罵声に現われていることが感じとれます。

言葉に躓く、迷う、考えるのは疲れる、という私の歩む道には、復元門の次に安危門があり、己の悪性が社会や周囲に及ぼした危険や不信をどう認知して、そこから生じる危惧にどう対処すべきかを自ら問い、その実践も問います。するとこの道には第三の開示門が立ち現れます。自己の全悪性を開示しながら、事件やそこに到った自己の全容解明を目指しつつ、この開示を阻むトラウマや価値観思想や宗教習慣もとらえなおし、自己形成史を記述していく門です。すると開示門で明らかになった問題を、直したり治す変革門が立ちあがってきます。同時に立ちあがってくる第五の賠償門があります。御遺族や被害者の精神的苦痛や経済的損害についての賠償

を問う門です。常に実践も同時に問われるので、賠償門は同時に賠償実現能力、つまりお金を稼げる能力を持つ為にどんな努力をどれ程身につけているかが問われます。それは更に、生活能力の涵養でもあり、更生生活の基盤でもありますから、このことに時間を使ってもなんら恥じることはないと思えます。但し、金の亡者や金の奴隷にならぬように、志は賠償にあることを毎日確認してはいますが。

——この門の先にどんな門があるかな——

寸評

博識と透徹した思考で門についての所見を披歴している。中国の天安門、パリの凱旋門、今昔物語の羅生門、仏教の仏門、山門、寺門、地獄門など東西古今の門が登場。刑務所の門を入り、自己を見つめていると、復元門、安危門、開示門、変革門、賠償門などの自己凝視を経て、被害者に対する償いや賠償問題と対峙して生きる道が前途に広がる。こうした哲学的な門を潜ることは、これからどう生きるかに繋がってくるようだ。



紅梅殿童王夢幻抄

宮城刑務所 K・M

紅の

雲ぞと見ゆる

梅の花

吉兆さかりと

鶯ぞ鳴く

良将王はその日、双子の妹安寿女王と共に、日頃にも増して華やいだ童装束を着せられ、母子三人八葉網代車にて外出した。

牛車は鶯の鳴き交わす都大路をゆるゆると進んだが、さりとして然程の刻も要せずに目的の門近へ至った。

然れど——、世界は一変した。

そこは紅梅の咲き誇る宏壮なる第宅であった。母の黒髪や装束に焚き染められた薰物とはまたちがった、生命力を謳歌するかのとき芳香に誘われ、長物見から外界を覗けば、その第宅の築地塀の上辺からは紅梅の花々が早春の陽射しを浴びて吹き零れているのであった。

〔起〕

牛車は第宅の東四足門を潜り、車寄に憩うた。母に促され、牛童が据えてくれた透廊を踏み、宿りへびよんと跳び降りると、中門廊から第宅の奥へ伸びた透廊の両側より、紅梅の枝々が十重二十重にさしかけて、花袂にて絞まれた深山幽境にある春べの隧道を思わせる奇観となつていたのであった。隧道の果てにて春陽を湛えた南池が光っている。

良将王と安寿女王は応接に現れた老尼に手を引かれ、壺庭の小佳景を右手に透廊の奥へと導かれて行つた。母とは車寄にて別となつたのだが、

兄妹はそれと気付かぬほど、その景観に気を吞まれてしまつていた。

案内された広廂に入るなり、良将王は大きく目を見張つた。鮮やかな色の総角が優雅に結われた几帳と、童向けであろう楽しい意匠の花鳥風月が倭絵にて描かれた屏風が交互に立て廻らされており、況や、そこには十人ほどの童たちが優しげな女房らに見守られて自儘に遊んでいるのだつた。

幼童らは齡二つから六つくらいの男女で、良将王や安寿女王と同じように晴装束を身に纏っている。床には所狭しと大小様々多種多様な玩具が用意され、そのいずれもが名のある工房にて制作された逸品であろう煌なる品々であった。

「姫、御名を何と申されますか？」

三つくらい年長であろうか、角髪をきりりと結つた整つた面立ちの利発そうな男子が安寿女王の前に歩みきて尋ねた。

「安寿、と申しまする」

頬を紅らめながらも安寿女王ははきはきと応じた。

「おお、安寿姫どの。わたくしは七月丸と申します。さあ、ご一緒に遊などをいたしましょう」

七月丸はそう言うなり安寿女王の手をとつた。安寿女王に嫌う素振りはない。いつもであれば妹を見知らぬ男子に連れ去らせる良将王ではなかった。だが、しかし、この日ばかりはちがつた。

良将王は情愛深き妹のことなど漫にして、ただ一つのものに目と心を奪われていたのである。

それは、木馬だった。黒漆塗の黒駒である。

平時絵時に彩漆によつて描かれた武の象徴である柏葉の文様が馬体を蔽っている。手綱、鞍橋、頭絡を飾る組紐は真紅である。その留具金には金銅が輝き、頭絡の額中央部には円い朱総の付いた銀鈴。青地錦に詰物が施された鞍。鬣と尾は黒絹の組紐を総角に結束し、威を放つがごとく意匠であつた。

良将王は圧倒され、魅了され、夢歩きのごとく黒駒に歩み寄り、太い真紅の手綱を愛しき物のように握り、乗馬した。黒駒はゆらりと前後に揺れ、頭絡の銀鈴をちりりんと鳴らした。黒駒の基底部は弓形に工夫されているのだった。良将王は自らをその揺動に合わせた。そうして、忽のうちにただ一人、空想の世界へと没入して行ったのである。

京洛の大路小路を縦横自在に駆け巡る。都人らの驚嘆する態を尻目に、一陣の風となり、天空へと翔け上がる。

雲海を蹴散らし、霧を破り、東へ飛翔し、富士の山嶺を俯瞰し、外界の隅々までもを睥睨し、そして呼号する。

——これこそが、神馬なり！

〔承〕

〔用命天皇の御子厩戸豊聡耳さまは推古天皇の御代に皇太子となられたが、幼き頃より慧眼伶俐であらせられ、その威儀作法は求道千年を修した高僧のごとくであったという。ゆえに、聖徳の皇太子さまと呼ばれた。〕

推古六年四月のことである。聖徳太子は良馬を求められ、諸国諸郷へ公告をなされた。諸国諸郷からはときをかわさず、挙りて精選された良馬が献上された。

聖徳太子はその日、お住いである斑鳩宮の正殿の御階におでましになられ、南庭に勢揃いした数百頭もの駿馬のなかよりただ一頭の馬をびたりと指さされて、

「これこそが神馬なり」

と仰せられた。

この馬のことは甲斐国より献上された烏駒と称される黒毛の馬であった。太子は東宮舎人調使磨を召し、この黒駒を別格に飼養しよう命ぜられた。果してその年の九月、黒駒は調使磨によって周到に調教がなされ、美

麗なる飾り馬に装束されて太子へ奉還された。

調使磨が轡をとる黒駒に太子が乗馬するなり、黒駒は突如として彩雲に包まれ、天高く飛翔した。臣下の者どもは呆然と天を仰ぐばかりでなす術もない。そのなかで調使磨だけが黒駒の右首にしがみついて太子と共に行くことができたのであった。

聖徳太子は、その三日後に調使磨に轡をとらせた黒駒に乗馬され、何事もなく斑鳩宮にお戻りになられ、臣下の者らに次のごとく語られた。

「わたくしはこの神馬に乗って高層雲を突き抜け、雲海を駆け、霧を破り、富嶽を飛び越え、信濃、越後、越中、越前を巡ってきた。」神馬と一体となりて飛翔するは、雷と化したような心地であった——とな——

〔転〕

良将王は牛車のなかで夢現つに目を醒ました。母と安寿女王が何やら楽しげにお喋りをしている。家路を辿る牛車の揺れのなか、母の膝に抱かれて眠っていたのだった。

夢は父に聴かされたことのある聖徳太子さまの烏駒の伝説だった。太子さまと自分が混淆してしまった夢幻の妙に良将王は微笑んだ。

「あら、お母さま。兄君は笑っておられます」

「まあ、ほんに。何の夢を見ましようや？」

「ずっとお馬に乗っておられました」

「ふふふ、それはそれはきつとお楽しみでしたこと」

「うふ、お母さまも」

「ええ、ええ、そして安寿、そなたも」

大人たちが紅梅の季節にことよせた宴を楽しむ間、幼子らを一つ所に遊ばせておく。主催第主のそんなはからいであつたのであろう。

母の吐息からは酒の匂いがした。良将王はその匂いが嫌いではなかった。父が母子三人の暮らす第宅を訪うた時、母は父に勧められて酒を召される。

常日頃にも増して、母が美しく装い、機嫌よく、優しく、若やぐどきの匂いであった。

良将王は微笑み続ける。鶺鴒ひわの囀りに似た安寿女王のお喋りが、母の吐息あまの甘い匂いが、牛車の揺れと共に彼をふたたびの眠りへと誘った。

麗うらうらに

紅くれないにほふ

春はるさらば

八葉くろはのゆらり

偲おもびつるかも

〔結〕

菅原道真公すがわらのみちざね（八四五〜九〇三）の第宅は紅梅の佳景を賞賛され、紅梅こうばい殿どのの通称にて都人に親しまれた。

藤原忠平公ふじわらのただひら（八八〇〜九四九）には産み月足らずの七月にて出生したという伝承がある。ただし、幼名についての確かな史料はない。

— 完 —

寸評

平安の世。童王の良将王は双子の妹安寿女王と紅梅が咲き誇る殿中で、その景観に見とれた。童たちが玩具で遊んでいる広場で、良将王は黒漆塗の木馬に魅せられ空想の世界へ没入した。京の大路小路を駆け巡り、天空へと翔け上がる。雲海を蹴散らし、霧富士の山塊を俯瞰し、下界の隅々までも睥睨した。「これこそが、神馬なり！」。父から聞いた聖徳太子の伝説を夢に見たのだが、本人は満足した。この筆者らしい平安時代の夢物語である。



これからのこと

青森刑務所 O・K

私のじいちゃんは、とても頑固で無口で人の言う事など聞いて聞き入れない人でした。優しかった思い出もほとんどありません、普通お酒を飲んだ時くらいは楽しそうにするものでしょうが、私のじいちゃんはお酒を飲んでも無口なままで、何故いつも機嫌が悪いのかと幼心に思ったものでした。誰かと話してる姿を見た記憶もほとんどありません。そんなじいちゃんも歳を取り癌になってしまい何度目かの手術のち、もう長くはないだろうと言われる程に弱ってしまいました。そんなある日、私がお見舞いに行くといつものようにベットに横になり窓の外を眺めていました。話を掛けても返事はほとんどありませんでした。仕方なく隣の椅子に座り一緒に窓の外を見ていました。その時ふと、じいちゃんが「死にたくねーなあ」と言ったのです。私が「どうしたの」と聞くとしばらく黙りました。そしてまた「死にたくない」と言ったのです。私は何と言ってあげたらいいのかわからずにいると「あつという間だからな、人生なんて。大事にしろよ」とじいちゃんが言ったのです。私にとっては一生忘れられない言葉です。じいちゃんは、その日の夕方に息を引き取りました。せっかく胸の内を明かしてくれたのに、やっとじいちゃんの本音のようなものが聞けたのに、じいちゃんは駆け足で、ばあちゃんの待つ天国へ旅立ってしまいました。最後の言葉はじいちゃんの八十三年間生きた感想だったのか、教訓だったのかいずれにしても私に残してくれた言葉でした。

今の私は、じいちゃんの最後の教えの通りに生きられているのだろうか。「人生は短いから大事に生きろ」という教えを守れているのだろうか。残念ながら今までの私には守れていなかったようです。皆さんは今までのような生き方で自分が死ぬ時、本当に後悔しないと云えるでしょうか。

私達受刑者は出所すれば、元の普通の社会人に戻るといっわけでは残念ながらありません。いくら反省したり後悔していても元受刑者というレッ

テルは一生ついてまわります。どんなに頑張っても元受刑者として生きていかななくてはならない、そんな私達には大事な事が三つほどあると私は考えます。

一つ目は、「もう二度と刑務所に戻って来ない事」出所する時は誰もがもう絶対に戻って来ないと誓うはずですが、社会に戻り時間が経つとどうしてか再犯をしてしまうのです。それだけ元受刑者にとって社会は生き難い所なのかもしれません、刑務所に戻って来るのだけは止めなくてはならないと思います。私は、逮捕前の生活と出所後の生活のリズムや生活習慣はすっかり変えなくてはいけないと思うのです。同じように生活をしてしまえばまた同じ結果になる可能性が大きいと思います。何か少しでも変えて生活していかなくてはいけない。簡単なようで難しい事です。

次に大事にしないではいけない事と思うのは、必ずどんな人にだって待っていてくれる人がいると私は思っています。「自分にはいない」と言う人もいると思いますが、必ず誰かいるはずなのです。人は一人で生きてきたわけではないのですから。「自分には誰もいない」と言う人は、待っていてくれる人に気づいていないか、待ってくれている人を受け入れようとしていないかだと思えます。それぞれにいろんな事情はあつて当然ですが、しかし待ってくれている人の事は素直にありがたく思うべきです。そういつた意味でも大事にしなくてはならない二つ目は「家族」だと思えます。今こうしている間も受刑者である私達の事を思い心配してくれたり、胸を痛めたりしてくれています。時には手紙をくれたり、差入れをしてくれたり、これほど刑務所生活で心の支えになる事は他にはないのではないのでしょうか。そんな家族をこれから私達は何倍も何倍も大切にしていかななくてはならないと思うのです。もつとも身近な人を幸せに出来ない人間に愛も優しさもないのではないのでしょうか。大切な人と一緒に居られる時間は思っているより長くはないでしょうか。自分には家族なんていないという方もいると思います。ならばこれから大切な家族を築けば良いのではないかと思います。どうせ自分には無理という方もいると思いますが何故簡単に諦めるの

か。歳だから、前料があるから、お金がないから、それらはやろうとしない言い訳ではないのかと私は思ってしまうのです。たった一回の人生です。どうか諦めずに歩んでみるべきなんだと思います。

最後に私が大切だと思う事は「生きる事」「命」です。元受刑者として生きていかななくてはならない私達には、普通に真面目に生きてる方々よりきつと生き難く厳しい生活が待っているとあります。しかし、どんな事があっても自ら命を絶つてはいけませんし、一日でも長く元気で生きなくてはならないと思います。これを読んでる方々もあと五十年もすればほとんどの方が生きてはいないと思います。たったの五十年です。残りそれくらいしか我々には元気でいる時間がないのです。私達は死に向かって生きてる以上それは避けられない事です。そう考えると私はじいちゃんのお教えの通り一日一日を大切にしなければと思えてきます。何度も言いますが一度きりの人生です。私達は刑務所で生活する為に生まれてきたわけじゃないはずで。もう一度、自分の「命」の意味を考え時間を大切に命を大切に生き直してみるべきなのです。

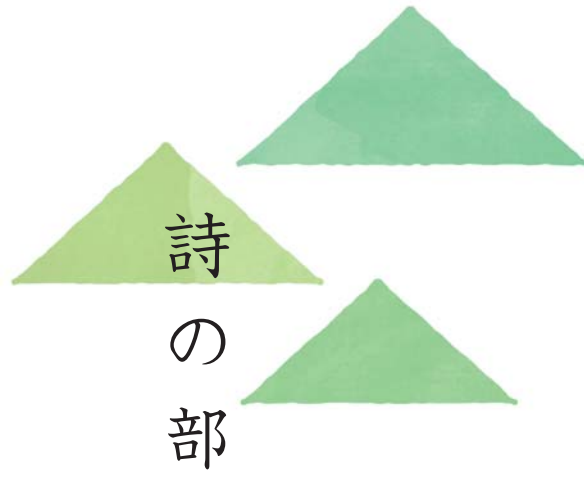
私も皆さんと同じ受刑者です。だからけして偉そうな事を言うつもりはありません。今までの自分を本当に反省し後悔しているので自分にけじめをつけるために、そしてもう一度人生をやり直す為、今回書かせてもらいました。皆さんの参考になる事が少しでもあればという思いもあります。先に書いた様に、皆さんの中にも亡くなった人との思い出がある方もいると思います。生きている私達は亡くなった人にガツカリされる様な生き方はしてはいけないのだと思うのです。今、頑張らなければ、変わらなければきつと後悔しか残らない人生になってしまうと思います。きつと誰にでもやりたい事や夢があるはずで。自分の家が欲しい、自分の店を持ちたい、車が欲しい、結婚したい、子供が欲しい、旅行に行きたい、美味しい物が食べたいなどなんでもいいと思います。その希望の全ては刑務所には実現できません。

ほんの少しの間でもいいので今までの自分を振り返るきっかけにしても

らえたらと思います。こう話してきた私も自分の事をよく振り返り考え、どう生きるべきかを思っていました。これからの生きる時間を共に大切にしていきましょう。きつと幸せだと思える瞬間が我々にも待っていると信じて生きるだけです。

寸評

祖父が死の直前で遺した言葉。「あつという間だからな、人生なんて。大事にしろよ」。一生忘れられない言葉だが、今は受刑者の身である。自分の生き方を反省し、大切なことを守って行くこととする。①は「もう二度と刑務所に戻ってこない」、②「待つてくれている人（家族など）を大切にする」、③「生きること（命）を大事にする」。今までの自分を反省し、もう一度人生をやり直すために書かれた文章が心に残った。



詩
の
部

審査員

日本現代詩人会会員

日本文藝家協会会員

宮城県詩人会顧問

原
田
勇
男



送り火

福島刑務所 N・T

やあ、久しぶり。 久しぶり。

見たかい。 見たよ。

相変わらずだね。 相変わらずだな。

人間は愚かだね。 愚かだね。

まだ続けるんだね。 その様だね。

もう底なしだね。 どこまでもね。

また憎しみが増えたね。 ああ、増えたね。

これまで何人殺したろうね。 数えきれないさ。

これから何人殺すだろうね。 それも数えきれないさ。

あつちの方でもそのうちやりそうだね。 ああ、始めるだろうね。

また死ぬね。 たくさん死ぬね。

飽きたりんのかね。 飽きたりんのか。

痛まないのかね。 マヒしちまつてるのか。

いつか気づくかね。 そう願うけどね。

間に合うかね。 そうだといね。

中では繋つなってるのにね。 ひとつなのね。

すっかりバラバラだね。 てんでんにね。

あれじゃ満たされんね。 あれではね。

渴きは消えないね。 消えないさ。

いつからこうなっちゃったのかね。 はじめからなのかもしれないな。

それは悲しいね。 悲しいさ。

心が痛むねえ。 痛むね。 . . .

挨拶の方は済んだのかい。 ああ済んだよ。

そっちはどうだい。 とっくに済んださ。

なら、あとは帰るだけか。 そうなるね。

・
・
・

今日は夕陽がきれいだね。 きれいだなあ。

それだけで充分なのにね。 ほんとうにね。

もうすぐ火が灯ともるよ。 ああ、もうじきだね。

また来年だね。 うん、また来年だ。

じゃあ、それまで達者でね。 ああ、お互いね。

寸評

お盆の季節。あの世からこの世に里帰りした二人は久々に会う。この世では相変わらずのことが起きている。二人は会話しながら、この世の現象を論評する。「人間は愚かだね」「これまで何人殺したろうね」「これから何人殺すだろうね」…。この作品は明らかに戦争をテーマにしている。おそらくロシアのウクライナ侵攻を踏まえて人間社会を批判した詩だろう。人間同士の醜い争いは絶えることがない。金賞にふさわしい作品だと思う。



私という人生

福島刑務支所 M・M

中庭の木々が風に揺れている

大地に根ざし 自由に動けぬ身は同じだが
一心に光を求め 枝を伸ばし 葉を繁らせ
与えられた場で 精一杯命を煌かせている
木々は私に問うてくる

「おまえは懸命に生きているのか」と

私は私に問う

春 芽吹きするとき さあ動き出すときだと

誰かの背中を押すことはあっただろうか

夏 照りつける日差しの中

木陰の安らぎのようなひとときを

誰かに与えることはあっただろうか

秋 実りのとき その実りを分け与えたり

誰かの実りを称えたことはあっただろうか

冬 厳しい寒さに自分の弱さが見えるとき

誰かの孤独に寄り添うことはあっただろうか

私は答える

情けないほど周りのことなど見ようとせせず
精一杯なふりをして自分のためだけに生きた
思いやりや余裕もなく後悔ばかりだったけど
生きていることを投げ出すことだけはしなかった
ときに嵐の中で 枝は折れ 幹が傷ついても
巡る季節ごとに年輪を重ね 私は生き延びた

人生の春も夏も秋も冬もまた巡ってくる

しかしどんなに厳しい冬が巡ってこようと
春の訪れを信じ耐えて待てる私がここにいる

何度も乗り越えてきた冬の中で根を深く張り
少しずつたくましく しなやかさを身につけ

揺らぐことのない私になれたのだ

私は私しか生きられぬ私という人生を生きている

自分が大切に思い 自分を大切に思う人が

いつまでも笑っていてくれることを願う

私は生きる 木々と対話し風を楽しみながら

今日も気持ちよい風が吹いている

寸評

中庭の樹木は自由に動けないのに、一心に光を求め、枝を伸ばし、葉を繁らせ、与えられた場で、精一杯命を煌めかせている。その木々が私に問いかける。「お前は懸命に生きているか」。この真摯な問いに自分以外の人々とのように関わってきたかを自省する。生きる上で他者とのように心の交流を深めるかが大切だ。これからも他者を思いながら、自分の人生を生きていることを決意する。格調高い詩である。



壁

山形刑務所 H・S

ぶ厚くて 硬すぎて 崩せない大きな壁は
崩さずそのまま よじ登ればいい
壁を掴んだ手の痛みも 必死さを囓う周りの声も
辛さも苦しさも何もかも 背負ってよじ登ればいい
崩さず残して超えたなら 壁は姿を変えて
あなたを守る盾となるでしょう

大きくて 高すぎて 越えられない大きな壁は
一つの大きなノートに変えればいい
拭い切れない後悔も 悩んだ末に出した答えも
気付きも学びも何もかも 片っ端から書けばいい
夢中でノートを埋めていけたら いつか壁を登り切り
向こうの景色と出会うでしょう

壁を越えたそのあとは
世間の冷たい風が吹くかもしれない
そんな時 壁はあなたを守り
まっすぐ歩くために支えてくれる

壁を越えたそのあとも
過去のあなたがあなたを呼ぶかもしれない
そんな時 壁はそれを遮り
弱いあなたを追い払ってくれる

壁を越えたそのあとに

ふと後ろを振り返ることがあるかもしれない

そんな時 壁に書き綴ったことが

振り返らずに前へ進めと教えてくれる

崩さず超える 壊さず残す

壁と共に生きる

寸評

生きていると、だれでも苦しんで壁にぶつかる。しかし、壁を壊さず、そのままよじ登ればいい。崩さず残していれば、壁は姿を変えて守ってくれる。大きく高すぎて越えられない壁は、一つの大きなノートに変えればいい。自分が経験したことを悔いも気づきもノートに書き込めば、いつか壁を越えて別の景色が見える。壁を越えたら、壁が世間の冷たさから守ってくれる。壁に対するユニークな発想が生きている作品である。



決意

福島刑務支所 S・S

ありの儘の自分を認める
上手くいく自分しか認めてないと辛くなる
弱点は使い方によっては
人生における最大の資源
弱点を知る事で人は強くなれる
何事も完璧というものは無いのだから
完璧を求めずに出来る限りベストを尽くす
最善を尽くす為に力を抜く
力が入り過ぎるから空回りするし失敗もする
失敗は避けられなくても学ぶ事は出来る
躓くのは恥じゃない
立ち上がれないのが恥だ
今を生きる事を忘れてはいけない
今の繰り返しが過去になり
未来はそのうちやってくる「今」
人生は常に「今」しかない
今日という日は明日にはない
毎日が取り返しのつかない日
言い訳をしているうちに
人生はあっという間に終わる
人生は限られているのだから
チャンスはいつでも「今」だ
倒れなかった者が強いんじゃない
倒れても立ち上がるものが本当に強い
たとえ今日が苦しくても

明日笑えるのは自分次第

何事も行き詰まればまず見方を変える

全て心持ち一つ 物の見方一つ

嫌な事でも明るくする事が出来る

辛い事でも楽しいものにする事が出来る

変えられるとも言えるし

変わってしまうとも言える

未来は常に過去を変えている

変えられるのは未来だけじゃない

過去はそれだけ繊細で感じやすいもの・・・

悩みは過去から来て 不安は未来から来て

幸せは「今」ここにある

今から始めれば明日は変わる

寸評

一つの詩のなかで、三つのテーマを設定して、自分の決意を述べている。「ありの儘の自分を認める」「今を生きる事を忘れてはならない」「何事も行き詰まればまず見方を変える」という課題について、それぞれ自分の考えを披歴する。いささか理屈が優先する作品だが、情性で生きているよりも、時にはこのように反省を重ねながら、前向きに生きて行くことも必要である。



ありがとうの魔法

山形刑務所 十三郎

たとえいい成績がとれなくても
たとえ走るのが遅くても
たとえ世事に疎くても
誰もが使える魔法の言葉は
ありがとう。

お互いを支えあうのが
人の世ならば

ありがとうの魔法は
もつと身近なはずなのに
もつとありふれた言葉のはずなのに
なぜだろう

魔法の言葉が聞こえない
ありがとうの波動を感じない

選ばれた誰かではなく
何かに優れた誰かではなく
この世に生を受けたひとならば
誰もが身につけているのが
ありがとうの魔法。

だから今よりも
もつともつと使ってみよう
もつともつと口にしてみよう
みんな誰かを支えてる
みんな誰かに支えられてる

そのことに気づいたら
今より少しだけ
魔法使いになりやすくなる 少しだけ。

ありがとうの魔法に限りはない

使ったら使った分だけ

パワーアップする

そして

使ったら使った分だけ

幸せになれる

ありがとうの魔法が

あちらこちらで花開く

世の中になったら いいな。

寸評

この筆者は「ありがとう」を魔法の言葉だという。世知辛い世の中では、なかなか「ありがとう」が言えない。戦争だ、コロナだと殺気だった昨今では、「ありがとう」と口に出して感謝する機会が少ない。しかし、この世は人と人が支え合って行かなければ成り立たない。世の中を回して行くためには他人に心を開き、相手に「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えることも必要だ。明るい「ありがとう」は魔法の言葉だから。



山あいの里で

宮城刑務所 T・S

秩父多摩国立公園
数馬の里…

少年の日の夏休み

蟬を追って行ったとき

森の出口を失って

仰いだ空は暗かった…

鳥が啼き 足許に蛇が這って

刻々と独りになってゆくとき

もう目をつむるより ほかに

知恵が涌いてこなかった…

ときどき 木の枝が折れて草叢に落ち

それが蜂の巣を脅した

俺は虫籠を捨て モチ竿を折り

目をつむって木株に坐り 泣いていた

雲を涌かした陽光が

昏れ掛かる雲取山を 僅かに染めているだけで

もう明るい場所を失っていたのに

民宿の女の子が 深い森を押し分けて

近づいてきたのだった

緑の森は深かったが 静かで…

その子に手を引かれ 山を下りてきた

途中 ひっきりなしに

喋り続けていたのに その子は

哀しみを潤んだ瞳で ただ…
笑みを返してくれるだけだった

不幸なことに 生まれついでの啞だと

民宿の主は教えてくれたが

俺は その子の温かい掌を

もう忘れられなくなっていた

秩父多摩国立公園

あの山あいの里で

いま

あの子は何をしているだろう

寸評

少年時代の夏休み。秩父多摩国立公園・数馬の里で、蟬を追って道に迷った少年は、虫箱を捨て、もち笠を折り、木株に座り泣いていた。そこへ民宿の女の子が近づいてきて、その子に手を引かれ、山を下りることができた。少年はしゃべり続けていたのに、少女は何も語らず笑みを返すだけだった。後で知ったことだが女の子は生まれつき話せない聾啞者だった。あの子はどうしているだろうと思いやる詩で、素朴だが心に残る作品だ。

短歌の部



審査員

日本歌人クラブ会員

「地中海」会員

宮城県芸術協会 文芸部運営委員

宮城県歌人協会 「地中海湾の会」副代表

上林 節江 先生



居室衣の袖のすき切れ目にとまり過ぎた時間の長さに気付く

山形刑務所 鴉 林檎

寸評…「すき切れ」とは摩り切れて穴のあいた状態のことでしょうか。それに象徴される長い歳月は自分を直視する時間でもありません。下の句に深い哀感が伝わります。



古里の天気予報を獄に聴く夏の祭りの始まる今日に

宮城刑務所 桜子

寸評…「聴く」はしつかり聞き入り確かめるという意味をもちます。「天気予報」を起点として古里への思いを抑制的に詠い、深い作品になりました。



冬の陽の届き手許の明るめば仕事捗る老眼のわれ

宮城刑務所 T・S

寸評…上の句の状況描写が適切です。「陽」「仕事捗る」「老眼」の三つの具体語が互いに繋がり合い、生活の動きがくつきりと切り取られいい一首になりました。



柵を一つ降ろすと決めた夜は励ます様な満月でした

福島刑務支所 S・S

寸評…この世はしがらみだらけです。そして、なかなか降ろせないのがしがらみ。しかし、降ろすと決意した作者を励ますような満月とは素晴らしい。明るい未来の予感がします。



父の死を知りたる夜は眠れざりおくやみなく降る雨の音せり

山形刑務所 蟹 牡丹

寸評…悲しみを小止みなく降る雨音に仮託して表現したところが上手です。より深い悲しみが伝わります。見守ってくれていますよ、乗り越えて下さい。



銅

故山だと思ふ格子の画角から冬の夜空に蔵王が光る

山形刑務所 天聖

寸評…場面の切り取り方が巧みです。「格子の画角」とは独自の視点。そこから望遠鏡のように、ふるさと蔵王の光る景色が拡大され、スケールの大きな短歌になりました。



銅

見えるまま描けばいいよと聞いてから青色すてた私だけの空

青森刑務所 I・S

寸評…「青色すてた」とは毅然としています。青色とは社会一般通念をさすのでしょうか。自分の目で見、心で感じた正直な色でいいのです。そうすれば、合点がいき、楽になることでしょう。



銅

面会后笑顔で手を振る父の目の涙に気付き後悔つものる

福島刑務支所 K・A

寸評…父の目に焦点を絞り涙をとらえたことにより生まれた作品。涙は言葉以上に雄弁に父の思いを伝えてきたことでしょう。しっかりと受け止めて下さい。



銅

逢えぬまま遠くへ逝った祖母の声「ぴしゃつとしろ」と背を叩く

山形刑務所 九州男

寸評…「ぴしゃつとしろ」が印象的です。この語で成功しました。しっかり者の祖母だったのですね。良い格言をもらいました。この言葉のなかにお婆さんは生きていますよ。



銅

謝るもなさざるままに父の逝き墓石磨けぬ還暦の朝

山形刑務所 白岳

寸評…「墓石を磨けぬ」という具体が効果的で、一首に力を与えました。この短歌を作ったことで磨くと同じ程の謝罪の思いは、お父さんに伝わったのではないのでしょうか。



佳

月のもの騰りし吾よ遠花火止み元の闇より黒き闇

宮城刑務所 K・Y



佳

窓越しの景色はいつも曇りがち掃除が出来ぬ窓の外側

盛岡少年刑務所 S・M



佳

通路脇2mmの隙間ヒョッコリと蒲公英顔出す此処で生きると

宮城刑務所 N・S



佳

本開く架空の世界いざなわれ塀の中でも心は自由

福島刑務支所 A・M



佳

罪深き吾も人にか採血に流れいる血の紅きを見つむ

山形刑務所 弘雀

寸評…閉経をむかえた女性の厳しい現実には悄然とした思いが重く伝わります。「遠花火」とは若き日の体への思慕でしょうか。「元の闇、より黒き闇」と反復した表現により、沈む思いが協調されています。

寸評…「外の景色は曇りがち」とは、何を指しているのでしょうか。手の届かないもどかしさ、不安の訴えとも取れます。現実の一端が窓を題材として発信されました。

寸評…二ミリの隙間とは極限の環境。タンポポに作者自身を重ねているように思われます。「此処で生きる」は、作者自らの思いの様に響いてきます。

寸評…読書により、別世界へと飛翔させる作者。架空の世界であっても心の自由度をアップさせる手段として親しんでいるのでしょう。その大らかさこそ自由なのですね。

寸評…採血時の血液の真紅を見つめ、自分も人間だと強く思う作者。血の赤は命そのものです。赤という色が、一首を強いものになりました。



佳

農作業どんな汚れも気にしないもつと汚い僕だったから

山形刑務所 篠ランド

寸評…農作業に従事しながら、心を自分に向けて内省の日々。落ち込んだり、嫌悪したりせず前向きです。ここから再生も再起も生まれてくるのではないのでしょうか。



佳

母想い侘しき夜なり雪交じる冬の嵐の重き声鳴る

山形刑務所 K・R

寸評…母を想い侘しきのつる作者。その気持を「冬の嵐の重き声」と表現しました。「鳴る」は「鳴く、哭く」にも通じ、作者自身の「泣く」なのでしょう。いっぱい泣いて、いいですよ。



佳

過ぎし時間^{ときみつ}3歳の愛娘^{まなこ}の写真触れ会えぬ祝えぬ成人式^{はたち}の今を

宮城刑務所 H・N

寸評…三歳で別れた愛娘も成人式。会いたい、祝ってやりたいという母親の思いが一首に結実しました。大丈夫。娘さんはしっかり生きていますよ。



佳

返事来ぬ手紙書く手の霜焼けに母思い出しました痛み出す

山形刑務所 真夏に涼月

寸評…霜焼けの手が痛むと「痛み」に焦点を当てて成功した作品です。手の痛みは心の痛みなのでしょう。痛みを感じるのは人間性があるから。短歌はそれを表現するためにこそあります。



佳

悲しびを空に絶叫せる我をうつ血の雨と濡るる曼珠沙華

山形刑務所 K・Y

寸評…悲しくて絶叫せずにはられない作者。激情を鬱血と曼珠沙華になぞらえました。血の色も花の色も激しく無慚ですが、その後に静かな時間が訪れることを祈ります。

俳句の部



審査員

現代俳句協会宮城県支部幹事

宮城県俳句協会常任幹事

宮城県芸術協会委員

鈴木三山先生



金

麦踏みや背に妹の寝顔あり

宮城刑務所 A・H

寸評…子どもの頃は麦踏みの手伝いをさせられたものだ。時には妹を負ぶっての作業。寒い中での仕事は辛かったが、すやすや寝ている妹の寝顔に頑張ることが出来たとだろう。



金

凜と咲く竜胆一輪背を正す

山形刑務所 曼珠沙華

寸評…竜胆は秋の七草の一つともされ、昔から親しまれてきた。立ち姿が凜としていて気品がある。作者は見習って礼儀正しく生きていきたいと思ったようである。



銀

意地を張ることむなしくて草の花

山形刑務所 弘雀

寸評…草野花はたとえ誰に踏まれても文句ひとつ言わない。肩を張ったり、意地を張って生きることのむなしさより、平凡でも穏やかな草の花のようになりたいと思うことは尊い。



銀

さまよへる霊の嘆きか牛蛙

福島刑務支所 T・M

寸評…田圃や野原でまるで牛のように鳴く牛蛙は不気味でもある。地の底から響くように思える。作者には亡くなった人の魂が彷徨っている嘆きの声に聞こえるようである。



銀

帰路夕焼懐メロのサビ口遊み

福島刑務支所 F・H

寸評…どこからかの帰り道綺麗な夕焼けに、思わず懐メロの一曲を口遊んだのだろう。サビとは低音で響きのあがる聞かせどころのことであるから、作者の十八番なのかもしれない。



銅

向日葵や幼き吾子の笑顔見る

青森刑務所 N・K

寸評…向日葵には無邪気で明るい笑顔がびつたりである。ことに自分の幼子の笑顔ならば無条件で喜ばしいに決まっています。



銅

予後の身のそぞろ歩きや青時雨

宮城刑務所 飛吾

寸評…予後とは病気で退院などした場合、今後の見通しのことを言うが、余命とかに関わることもある。掲句の場合はそれほど重病ではなさそうで、それは青時雨の季語から察せられる。



銅

わらべの手命吹き込む雪うさぎ

山形刑務所 九州男

寸評…子どもたちが作る雪だるまならぬ雪うさぎである。可愛らしいのが何よりであるが、子どもたちの手で目や鼻を入れられると、途端に生き生きとする。命を吹き込まれたかのように。



銅

大空へ風船帰る宛てもなく

福島刑務所 A・Y

寸評…お祭りとかで子どもたちの手には風船が持たされている。歩き回っているうちにふと手を放してしまったのだろう。風船は帰ることもできないまま大空へと消えてしまったのである。



銅

金盥水をはじくや初茄子

福島刑務支所 S・K

寸評…茄子は夏から秋にかけて紺色の実をつける。暑い時に収穫した初茄子の水の入った金盥に入れたのだろう。艶やかな茄子が明るい日差しを弾き返すさまが、いかにも新鮮で好ましい。



佳

千羽鶴の翼まっすぐ風光る

宮城刑務所 K・Y

寸評…病氣見舞いや平和の祈りに折られる千羽鶴。きつと心を込めて丁寧な折られた折り鶴なのだろう。翼がピンとしているのだ。風光る季節。きつと祈りは叶えられることだろう。



佳

寝返りの減りし安眠夜の秋

宮城刑務所 伏龍

寸評…今年の夏も猛暑の日が続いた。寝苦しくて何度も寝返りを打った。しかしやっとなような熱帯夜から解放される季節が来た。夜の秋とは晩夏の頃のことを言う。安眠できる幸せ。



佳

入院の日で止まりたる春だより

山形刑務所 蟹牡丹

寸評…何らかの病氣になり入院することになったのだろうか。それまでは桜前線の到来など春の訪れを心待ちにしていたのが、入院で途絶えた無念さがうかがわれる。



佳

麗らかや緑地遙かに座す蔵王

山形刑務所 龍齋

寸評…春が来て辺りが緑一色に覆われていく季節の到来。蔵王山を眺めると本当に雄大で麗らかな気分を満たされることだろう。爽やかな景色である。



佳

買初めもボタン一つの時代かな

山形刑務所 O・S

寸評…新年の行事の一つに初売りがある。買初め人々が、大勢詰めかける。正月の楽しみの一つでもあるだろうが、最近ではネット時代である。ボタンを押すだけで何でも買えてしまうのだ。



佳

笛太鼓消えないお盆の寂しさよ

福島刑務所
K・Y

寸評…かつてのお盆はとても賑やかだった。各地で盆踊りの笛や太鼓が鳴り響き、久しぶりに会う人々で溢れ返っていた。しかし現在ではめったに人に会うことも無い。



佳

魂を尽くした色の唐辛子

福島刑務支所
T・E

寸評…野菜をはじめ植物は物も言わずにそれぞれ皆死に生きているのである。唐辛子が真っ赤になるのは魂が込められているからだと思っているのだ。



佳

思う人のある幸せや初日の出

福島刑務支所
M・M

寸評…今の世の中は自然災害をはじめ、何かと生き難い時代である。そんな中でも思う人のある幸せは何物にも代え難い。



佳

暑すぎて蟬も省エネ実行中

福島刑務支所
K・A

寸評…芭蕉は「岩にしみいる蟬の声」と俳句にしたが、この頃の夏の暑さは凄まじく、蟬も省エネに踏み切り声を潜めているようだ。



佳

たゆたえど決して沈まぬ黄葉かな

福島刑務支所
F・N

寸評…秋も深まり、黄葉が進み池や川にも落ち葉の降る頃となった。すると川面に一枚の黄葉が浮かんでいた。たゆたいなながらも沈まない黄葉に作者は感動を覚えたのだろう。

川
柳
の
部



審査員

川柳宮城野社同人
宮城県芸術協会会員

佐藤
岩男
先生



野辺地蔵誰がかけたや赤マスク

青森刑務所 夢幻齋



幼子の特等席は肩車

山形刑務所 鴉林檎



コオロギの昔は音色今は味

山形刑務所 性帝サウザー



反抗期ついにきたなと文字で知る

福島刑務支所 I・A



燃やすため育てたのじゃないこの小麦

福島刑務所 N・T

寸評…路ばたのお地藏さまを敬い、大切にしている人々の気持がよく伝わります。前垂れではなく、赤いマスクとしたところも、時相をよくとらえています。

寸評…小さい子は肩車が大好きです。目の位置が高くなり世界が広がるからでしょう。十五年も経てば、肩車なしでも同じ高さから世の中を眺められるのですから。

寸評…秋の夜長を慰めてくれたコオロギでしたのに、近ごろは、人間の食糧危機をカバーする役割も。人間の身勝手を感じます。コオロギを絶滅させないように。

寸評…わが子にも反抗期がと思うと身に覚えがあるだけに、親として嬉しい反面、やっぱり腹も立ち、複雑です。やっぱり素直なおとなになって欲しいと願いながらも。

寸評…燃やされたり、踏み倒されたりするために苦労して種を播き育ててきたものではありません。小麦だって大粒の涙を流しているに違いありません。



銅

月の色匂感じる夏の空

宮城刑務所 M・K

寸評…お月様をじっくりと眺める機会もめっきり少なくなってきたような気がします。昔はお月様の歌もたくさんありましたし、友達でした。



銅

顔^{かお}しかめ我が身^みに詫^わびて薬飲^{くすりの}む

山形刑務所 千寿

寸評…身から出た錆とは云え、もっと自重していればと悔やまれる歳になってしまいました。親から頂いた身体です。大切に丁寧に取り扱いましょう。



銅

気がつけば秋刀魚も鯖も高級魚

山形刑務所 十三郎

寸評…大衆魚のはずでしたが、姿も形もスマートになってしまい、私たちの口にも容易には入らなくなってきました。ショーウインドウの中から「頭が高い、控えおろう！」と言っているようです。



銅

硬い手を嫌う子今は母を越え

福島刑務支所 O・N

寸評…お母さんの家を支えてきた頑丈な手よりも、柔な手で抱きしめてもらいたいと思ったこともあったでしょうが、少し大人に近づくにつれ硬い手のぬくもりも感じるようになったのでしよう。



銅

晴れた空今の僕にはまぶしくて

盛岡少年刑務所 H・S

寸評…晴れた空がまぶしく、とても輝いて見えるのは、自身の心がきれいなものを素直に美しいととらえているからでしょう。まっすぐ前に進んでもらいたいと思います。



佳

思い出は生きる希望の糧となる

青森刑務所 I・S

寸評…苦しい時には楽しかった思い出を頭に浮かべればがんばることが出来る、と何かで読みました。前を向いて、また歩き出すエネルギーにもなると思います。



佳

不自由な身でも心にある自由

宮城刑務所 伏龍

寸評…心の活動の自由は、誰も止めることは出来ません。誰も抑えることは出来ません。希望を持って前進です。



佳

母の日の似顔絵いまでも菓子箱に

山形刑務所 白岳

寸評…お母さんの似顔絵でしょうか。ちゃんと菓子箱に入れて大切にしまっておいて時々取り出し、お母さんとの思い出にひたることが出来るわけですね。



佳

マザコンと嘲笑されても母が好き

山形刑務所 反抗期

寸評…「マザコン」いいじゃないですか。お母さんの大好きな人は、お父さんを好きな人よりも多いはずですよ。私事になりますが、私は早く母を亡くしましたので、甘えた記憶はありません。



佳

厳しさも優しさと知る壮年期

山形刑務所 雪國

寸評…当時鬼に見えた先輩方も、後輩を出来るだけ早く一人前の社会人に仕立てようとかんばっていたのでしよう。今になって身にしみます。



佳

「血だけでもどうか外へ」と逃がした蚊

山形刑務所
H・S

寸評…せめて私の血を吸ったのだから、外を自由に飛びまわって欲しいという切なさを感じます。ユーモアのセンス抜群です。今年、血縁を結んだ蚊はどれだけになったでしょう。



佳

眠れぬ夜ふと口ずさむ子守歌

福島刑務支所
S・M

寸評…どうしても眠れぬ夜、気づくと多分、母親の背中
で聞かされた子守唄が浮かんできたのでしょう。子守唄
でなくても、よく口にしていた歌はよく覚えております。



佳

手出しせず見守ることも親の愛

福島刑務支所
E・M

寸評…生まれてきた時も、それから往く時も多分ひとり
です。誰の力を借りないで生きて行くことが、基本にな
るのでしょう。だから出来るだけ自力で行動できるよう
見守るのも親の義務です。



佳

手をつなぎ世界に平和が来るように

福島刑務支所
K・A

寸評…世界中の人々が手をつなぎ、肩を組み合えるよう
になるのは、いつのことでしょうか。世界中のみんなの
願いのはずなのですが…。



佳

虹を見て渡ってみたい吾子が言う

福島刑務支所
Y・T

寸評…雲にのつてみたい。虹の橋をスキップしながら渡っ
てみたい。多分どの子どもも一度は持った夢でしょう。
このやさしい心をいつまでも持ち続けたいものです。

文芸部門審査総評

— 作文の部 —

どの作品も切実な思いのこもった内容で読み応えがあった。「陽のあたる場所」は受刑者の皆さんが日頃考えている問題に向き合っ
てストーリーが展開する。出所して職業に就いても、世間の風は暖
かくない。元受刑者のレットルは一生の間付いて回るだろう。この
作品の主人公も職を転々として苦労する。しかし、最後の結びで小
学生の女の子が主人公を励まし、朝食を用意してくれた人のさりげ
ない好意が主人公の苦しみを救っていた。

「継続は力なり」「水のような生き方」「これからのこと」は、受
刑者の暮らしのなかで自己の生き方を反省し、どうしたら生き直せ
るかを実験に問いかけ、それぞれの体験から生まれた提言を自分の
言葉で表現している点が良いと思う。「選んだ道潜る門」と
「紅梅殿童王夢幻抄」は自分の個性を活かし、豊かな想像力を発揮
した作品である。惜しくも賞に届かなかった作品にも可能性があり、
また新たな挑戦を期待したい。

原田 勇男

— 詩の部 —

金賞に「送り火」を選んだのは、この世の人間ではない二人の会
話体で、今の世界情勢について語らせている独特の技法がユニーク
だからだ。人類は未だに戦争を克服できない。ロシアの不条理なウ
クライナ侵攻を踏まえて、この筆者は人間界の未来に警告を發して
いるのではないか。一見のんびりと会話しているようで、内実は深
刻な問題に向き合っている。現在の人間社会の実情は、この世の人
間ではない者にまで不安を抱かせているのだ。

「私の人生」「壁」「決意」の作品は、いかに生きて行くかについ
て考えながら、それぞれの答えを模索している。「私の人生」では
樹木や風と対話し、「決意」は自分なりの道を求めて前を向く。「壁」
はさまざまなトライで壁を越える方法と、壁を利用して逆に自分を
守る手立てを考えている。「ありがどうの魔法」はお互いに支え合っ
て生きているのだから、感謝の言葉が人間には大切だと語る。「山
あいの里」は牧歌の笛が聴こえるようだ。

原田 勇男

— 短歌の部 —

二一四首の歌は、どれも説得力のあるいい作品でした。どの人も、自分の思いをしっかりと見つめ心を尽くして詠んでいると感じました。

短歌は自分の思いを詠む文学です。明治の歌人 与謝野晶子は「まことの心を詠^{うた}わぬ短歌に何の値打ちがありません」と言いました。真理です。

私たちは、自分の思いを素直に表現します。また、思いを色や動物や風景や音、感触にことよせて詠むこともします。自由に言葉を編みましよう。大事なことは、何を言いたいのかをじっくり考えて言葉を選ぶことです。

短歌は訴えでもあります。自分や、大切な人に向けて訴えるように、祈りのように、つぶやくように作りましよう。

上林 節江

— 俳句の部 —

皆様真剣に俳句に取り組んでいただきありがとうございます。

今回は以前に比べて、明るい句や爽やかな句が多いように感じられました。よく辛い時は明るく。楽しい時は控え目になどとも言われますが、楽しんで俳句に親しんで頂くことが何よりと思います。

人間にとって自然に学ぶことは数多くあります。また落ち込んだ時などは何物にも代え難い癒しとなってくれます。

今後とも歳時記を片手に、大いに季語を覚えて素晴らしい作品をものにできますように心より願っております。

鈴木 三山

— 川柳の部 —

今年もたくさん楽しくなるような句や心に染み入るような句に出合い、わくわくしながら読ませていただきました。しかし、句の選をする。そしてランク付けをするという作業は、わたしにとって、いちばん苦手なことになります。この句が伝えようとしていることは、こうとらえていいのだろうか、あるいはもつと別のとらえ方も出来るのではないだろうか、迷うこともしばしばです。また、この句のこの部分を改めれば、もつと広がりや深みが出てくるのではないだろうかと思ったりも。川柳に限らず、他の俳句・短歌・詩・小説、あるいは絵画などにも言えることですが、作者の意図とは異なった「受け入れ」をされることがあります。それはそれで、作者もあきらめて、そのように読んでいただくしかないと思います。

深読みをされてそういうことにする 岩嬉

佐藤 岩男



絵
画
の
部

審査員

宮城県芸術協会運営委員

枡澤
怜
先生



相馬野馬追（神旗争奪戦）

宮城刑務所 W・M

寸評：人物、馬の描写が優れており魅力的な構成となった。



秋の溪流

盛岡少年刑務所 T・Y

寸評：溪流の表情と紅葉を上手くまとめた。



石川県の能登半島の軍艦島

宮城刑務所 M・K

寸評：軍艦島が夕日に映え、波の描写も秀逸である。



競演

山形刑務所 M・K



寸評：二人の女の子の表情が、
生き生きとしている。



龍虎

福島刑務所 S・Y

寸評：龍虎を緑と黄色で動的に表現した
所が良い。



弥勒菩薩

青森刑務所 T・T

寸評：菩薩の表情が優しく、見る人に
安らぎを与えてくれる。





佳

碧の鯨

福島刑務支所 I・A

寸評：鯨を幾何的に分割してアイデアが素晴らしい。



佳

夜会

山形刑務支所 オタク I

寸評：二人の少女はマンガチックだが、楽しい雰囲気を上手く表現した。



佳

お茶会 —めしあがれ—

福島刑務支所 H・S

寸評：色鉛筆で優しく表現し、出されたケーキもいかにもおいしそうだ。



佳

京都 正寿院『花天井』

福島刑務支所 E・M

寸評：天井に描かれた花の絵が美しい。



佳

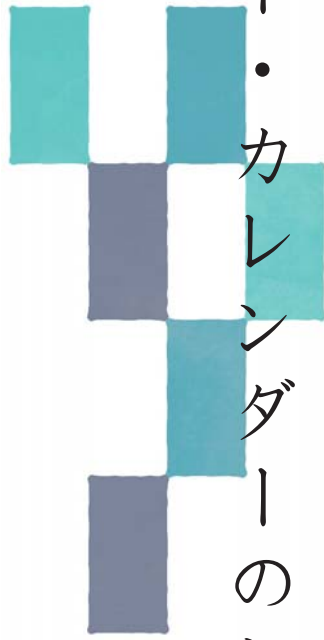
麦わら帽子の君

山形刑務支所 龍齋

寸評：少女の優しさとブドウの瑞々しさが爽やか。



ポスター・カレンダーの部



審査員

宮城県芸術協会運営委員

鈴木智枝先生



卯年

山形刑務所 オタク I

寸評：立体を意識した作品で技術的にも秀でています。卯月の美しいカレンダーになっています。



幸せに生きる秘訣
～感謝は潤滑油～

福島刑務支所 M・M

寸評：柔らかな優しさのあるポスターです。このような人間関係に大賛成です。



美しい日本

福島刑務所 A・F

寸評：優しい気持ちで表現されている所が良いと思います。標語の中にも少し色彩が欲しいです。



海恋しい季節

山形刑務所 GAMI

寸評：数字のレタリングの美しさ、その他丁寧な仕事ぶりに感心します。



毛筆の部

審査員

東北書道会副会長

鈴木 齊月 先生



南山之寿

宮城刑務所 舞吾

寸評：作品全体の構成、字形、線質、
申し分ない作品。

澄神靜慮具在華端



宋 太宗

福島刑務所 M・H

寸評：強靱な筆線で力強くまとめた作品。

佛說摩訶般若波羅蜜多心經
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切憂厄舍利子色不異空空不異色色即是空
 空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不减是故空中無色無受
 想行識無眼耳鼻舌身意無色無香無味無觸無眼界乃至無意識界無明亦無無明分乃至無老死亦
 無老死分無苦集滅道無智亦無得以此所攝般若波羅蜜多般若波羅蜜多般若波羅蜜多般若波羅蜜
 多有怨怼遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若
 波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等呪能除一切苦真不虛故說般若波羅蜜多是
 即說呪曰揭諦揭諦波羅揭諦波羅揭諦菩薩摩訶薩



般若心經

山形刑務所 Y・T

寸評：独特の文字形態で丁寧にまとめた作品。



蘭亭序

盛岡少年刑務所 M・Y

寸評：原帖の特徴を良く捉えた作品。



礼器碑

山形刑務所 Y・F

寸評：伸びやかな筆線で堂々と書作している。



法華経

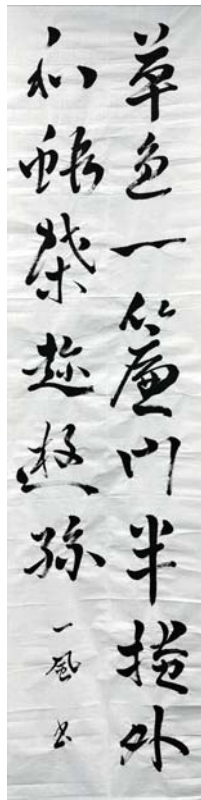
宮城刑務所 白蘭

寸評：一文字、一文字丁寧に気持ちを込めて根気強くまとめた努力作。



乙英碑

宮城刑務所 孤月



居節詩

宮城刑務所 一風



魏志邴原伝

宮城刑務所 雅風

寸評：ゆったりとして豊かな字形と、伸びやかな線線で良くまとめている。

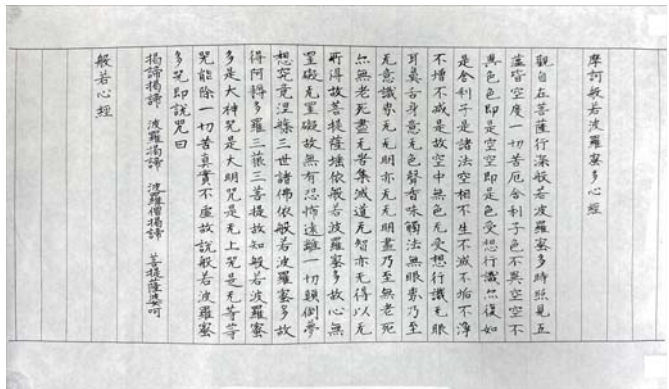
寸評：伸びやかな線質でゆったりと表現している。

寸評：重厚で力強い線質。字形も素晴らしい。

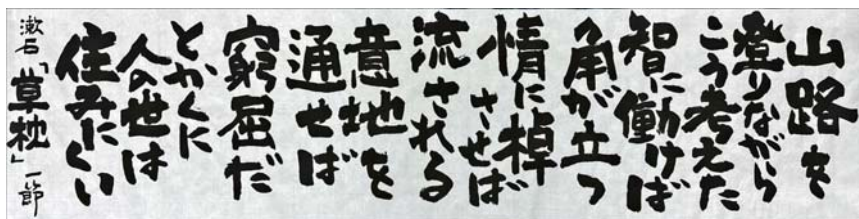


般若心経

福島刑務支所 H・S



寸評：心を込めて丁寧に書作している。

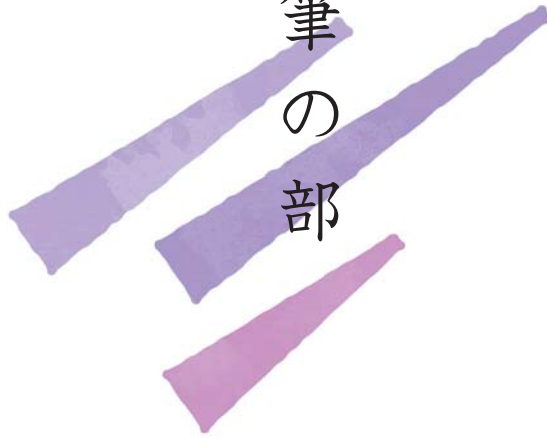


漱石「草枕」一節

福島刑務所 M・H

寸評：紙面全体の構成を考えながら力強くまとめた。

硬筆の部



審査員

東北書道会副会長

鈴木 霽月 先生

それでも人生にイエスと言う

困窮と死にもかかわらず、身体的な病気の苦悩にもかかわらず、また強制収容所の運命の下にあったとしても——人生にイエスと言うことができらるのです。



それでも人生にイエスと言う

福島刑務支所 A・M

寸評：全体の統一感、字形共に素晴らしい。

朧月夜

菜の花畠に入日薄れ
見わたす山の端霞か
春風午よく空をみれば
夕月かがりてにほい淡



朧月夜

山形刑務所 H・T

寸評：伸びやかな筆線で文字の流れが美しい作。

仁は人の良心なり
義は人の道なり

孟子



孟子

盛岡少年刑務所 Y・T

寸評：自然で気負いなく端々をまとめている。

更生を誓い
唱えてきた言葉

心が変われば 行動が変わる
行動が変われば 習慣が変わる
習慣が変われば 人格が変わる
人格が変われば 運命が変わる

今からでも遅くはないと信じることに



更生を誓って

福島刑務支所 M・M

寸評：書かれた文字から書者の今の思いが伝わるような作。

遺訓

瀬戸内 寂聴尼

自分は周りに許されて
存在しているのだから、
自分も周りを許すこと



遺訓

福島刑務支所 M・M

葉隠聞書第一ノ二

山本神衛門常朝

死に事と見つけたら、
早く死ぬかたに片付
くばかりなり。



葉隠聞書第一ノ二

山形刑務所 一盃

寸評：作品全体の構成、丁寧で確実な筆致が素晴らしい。

寸評：一画、一画丁寧に心を込めて書作している。

書画部門審査総評

― 絵画の部 ―

例年になく、すぐれた作品が多く、優劣をつけることが難しい状況でした。特に人物表現は生き生きしており、金賞にも劣らない出来映えであることを申し添えます。

枡澤 怜

― ポスター・カレンダーの部 ―

選ぶのに悩むほど秀作が多くありました。色々な雰囲気の中から選び、賞といたしました。基本的には、色彩の良さ、構成の良さ、レタリングの確かさなどに、留意したつもりです。

鈴木 智枝

― 毛筆の部 ―

年々大きい作品が増加し、日頃の練習の成果が良く表れている。半紙作品にも賞に値する作品があったが、惜しくも選外となったのは残念だった。

鈴木 霽月

― 硬筆の部 ―

現在の自分の思いを、文字を通して真剣に伝えようとする作品が多かった。

鈴木 霽月

編集後記

本年度も、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なる御協力のもと、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

仙台矯正管区